

健康づくり一丸

中路重之さん 賞は私だけがいただいたものではない。本県の短命県返上への取り組みは日本一の盛り上がりだと思ふ。健康に関する知識を広げ、学校の健康教育にも力を入れたい。健康づくりは地方創生の大きなテーマで、経済にもつながる。力を貸してほしい。

偉業、活躍 称賛惜しみなく

「キラメる活躍を」「心から敬意」。1日、青森市で開かれた第71回東奥賞贈呈式では、受賞した高橋弘希さん(38)、中路重之さん(67)、田邊優貴子さん(39)と八戸地方えんぶり保存振興会の偉業をたたえ、出席者たちから称賛と期待の言葉、惜しみない拍手が送られた。（本紙取材班）【本記1面】

「数年ぶりに青森にきた。ダウンジャケットを着てこなかったことを後悔している」。苦笑気味にあいさつした高橋さんは、芥川賞発表時と同じような黒の帽子に黒のパーカ姿。いつものひょうひょうとした語り口で会場を盛り上げた。

県近代文学館の伊藤文一室長は、今夏の特別展「平成の青森文学」に関するエピソードを紹介。「特別展開始の4日後が芥川賞の発表日だった。高橋さんの受賞が分かった時、頭が真っ白になって思わず『やった』と叫んでいた」と振り返り、「心から応援し期待する多くの県民がいることを知ってほしい」と話した。

弘前大学医学部の若林孝一部長は、2005年から続く「岩木健康増進プロジェクト」でのビッグデータ蓄積や、そのデータを基に生活習慣病や認知症の予兆を見いだすプロジェクトに取り組んでいる一など、中路さんの業績を並べ、「健康増進や短命県返上に結び付ける事業の中心的人物」とたたえた。さらに専門のスポーツ医学の分野では、

県民に希望 心から応援

柔道五輪メダリスト・古賀稔彦さんら多くの人材を育てたことも紹介。講演活動など多忙な日々を送るミスター短命県返上・中路さんに「このような活躍をされているからには、健康で長生きしていただかないと説得力がない」と、自らの健康管理をお願いすることも忘れなかった。

田邊さんの高校時代を「文武両道の達成に向け、勉学と部活動に一心不乱に励んでいた」と紹介したのは、青森高校の突倉慎次校長。今年10月の同校での講演会で生徒たちから寄せられたメッセージをいくつか読み上げ、「全ての世代の人々に希望を与えることもに、さらなる活躍を期待したい」とエールを送った。

八戸地方えんぶり保存振興会には、八戸市教育委員会、会長の橋本淳一教育部長が「今日の地域住民や観光客に親しまれるえんぶりの姿は、伝統を守りながら創意工夫をされた同振興会の成果。心から敬意を表する」と感謝を述べた。同市教委が来年からえんぶり初日の2月17日を「えんぶりの日」として学校休業日に定めたことにも触れ、「児童生徒が参加、鑑賞しやすい環境づくりの支援のほか、えんぶりの調査、児童向け副読本の製作も検討している」と話した。

東奥賞贈呈式



中